



鎮守の森だより

NPO 法人社叢学会ニュース

第137号

2026年5月1日

……令和8年度年次総会は『武蔵一宮 氷川神社』（大宮）にて……

6月20日（土）・21日（日）に開催

昨年度の年次総会は太宰府天満宮にて成功裏に閉幕したが、令和8年度は埼玉県さいたま市に鎮座する武蔵一宮の氷川神社にて、6月20日（土）に開催される。翌日21日（日）には、見学会として、埼玉県日高市に鎮座する高麗神社、同社とも関係が深いとされる高麗山聖天院勝楽寺、更には、濱野周泰副理事長が鎮守の森整備の企画設計並びに監修に携わった川越市に鎮座する川越氷川神社の社叢を訪ねる。

20日（土）の年次総会等は、本紙の3、4頁に時間等の詳細を掲載しているが、氷川神社の正式参拝及び境内の社叢見学の後に、同社社務所の大ホールにて、年次総会を実施する。年次総会の閉幕後に、氷川神社禰宜の馬場直也氏から「氷川神社の歴史と祭り」と題して、特別講演をいただく。

午後は、研究発表の後に、「千年の杜と『水』を未来につなぐ」と題して、シンポジウムを開催する。

シンポジウムでは、現在、氷川神社参道の社叢の保全復元に尽力されている一般社団法人地球守・有機土木協会代表理事、NPO 法人地球守代表理事の高田宏臣氏に「社域の環境・鎮守の杜を守り繋いで来た古の技を現代に生かす」（仮題）と題して、基調講演をいただく。

続くパネルディスカッションでは、高田氏を含む五名のパネリストを迎えて議論を深める。

パネリストとして、氷川神社権宮司の東角井真臣氏には「氷川参道の変遷と樹木管理について」、國學院大學神道文化学部長の黒崎浩行氏には「神職後継者教育と社叢とのよりよい連携に向けて」、瀬田玉川神社禰宜で一般社団法人第二のふるさと創生協会代表理事の高橋知明氏には「第二のふるさと創生協会の活動と神社界との連携」、一般社団法人地域緑花技術普及協会代表理事の細野哲央氏には「緑化技術者による社叢管理支援～越谷・久伊豆神社での活動記録」と題して、それぞれ話題を提供いただき、その後高田氏を含めて、鎮守の森の保全継承の意義と地域との関わりなどについて討議を行う。

総会終了後は、同社のホールをお借りして、会員相互の親睦を深めるために懇親会を実施する。

研究発表並びにシンポジウム、懇親会、見学会に参加希望の方は、3頁の様式に従って、社叢学会事務局宛て申込をお願いする。各参加費については4頁をご覧ください。

なお、社叢学会正会員で、通常総会を欠席する場合は、議決の関係で、必ず委任状を事前に事務局宛てご送付をお願いしたい。

『原稿募集』

『社叢学研究』第25号（令和9年3月発行予定）への投稿：論文・研究ノート・短報・資料紹介や調査報告と「鎮守の森の活動報告（祭・音楽会・調査・ワークショップなどの実施報告、抱える問題点など）」や「社叢訪問記」など、会員の皆様の多彩な原稿を随時募集しています。賛助会員の皆様の名刺大広告も無料受付中です。

* 次号掲載のためのおまかな締め切りは次の通りです。論文等は10月末日、活動報告等は1月10日。

* 書評欄では会員の皆さまの著作を取り上げています。出版された方は、ぜひ学会事務局へご連絡下さい。

* 印刷はオールカラーです。

原稿送付先：学会事務局（shasou@ams.odn.ne.jp）



京都と名園～景観生態学の視点から

話題提供：森本幸裕（社叢学会副理事長，京都大学名誉教授）

コメンテーター：今西亜友美（近畿大学総合社会学部教授）

進行：前迫ゆり（社叢学会副理事長，奈良佐保短期大学教授・副学長）

筆者は「景観生態学的研究を基盤とした都市における自然再生」に関する功績によって、「第19回みどりの学術賞」を受賞す

「景観生態学からみた京都と名園」

- ★風水と平安京と鳥羽離宮
 - ★輪中としてのお土居
 - ★雨庭としての京町家・降り井・枯山水
 - ★洪水を柳に風の桂離宮庭園
 - ★災いを巨大な価値に銀閣寺庭園
 - ★エコトーンを極めた修学院離宮庭園
 - ★フラクタルと生物生息環境縮景庭園
- NbS (Nature-based Solutions)
「自然に根付いた社会課題解決」

る荣誉に浴しました。授賞式後の両陛下との懇談で「なぜ雨庭に興味を持ったのか」と問われ、「地元京都には素晴らしい庭園があったから」で、「桂離宮にぜひどうぞ」と答えました。これがご縁で実現した両陛下の桂離宮ご視察の際に、古書院の前で伝統的日本庭園の多機能な素晴らしさをお話する機会を賜りました。京都と名園に潜む、「攪乱」とうまく付き合う知恵を現代に活かすことが求められます。

自然の3側面「要素」「パターン」「プロセス」：景観を形成する原動力は大小様々な「プロセス」です。大攪乱は短期的に災害ももたらしますが、長期的視点からは恵みの源泉となります。現在、過度な防災に加えて、里山自然資源のアンダーユース（人為攪乱の減少）が深刻な生物多様性の劣化を招いているのです。元号「令和」の典拠となった万葉集の梅花の宴や源氏物語に登場したフジバカマをはじめ、氷河期より継承してきた攪乱依存種の生育立地が失われています。

千年の都：日本列島は変動帯にあって、きめ細かな地質地形モザイク構造の生物多様性ホットスポットです。京都は千年の都といわれますが、方丈記にあるように災害多発で何度もクラッシュしています。しかし、自然立地を生かした土地利用と、禍を最小化する知恵によるレジリエンス（回復力）が特徴です。その秘密は景観生態学の著名な教科書にも引用される、背山臨水「風水」の都市づくりです。秀吉のお土居は大きな輪中でもありましたが、平和な江戸期に宅地化された場所にある頼山陽の書齋「山紫水明処」には、外水氾濫にも対応する「降り井」という大きな雨庭が設えられました。

NbS（自然に根差した課題解決）としての名園：八条宮智仁親王の「瓜畠のかるき茶屋」を起源とする池泉回遊式庭園最高傑作の桂離宮。桂川氾濫原の自然堤防と旧河道を利用した敷地造成と御殿や茶室等の床レベルは、桂川の氾濫を想定したものです。桂川沿いの竹林は洪水防備林です。庭園各所の直接的に雨水貯留浸透に貢献する意匠だけでなく、茶庭の塵穴も雨水排水に役立ちます。そして昭和の大修理

の際には、高床式の古書院の柱の床下部から、何と十数本の浸水痕跡が確認されたのです。川の恵みを受けつつ床下浸水は許容する、簡素で機能的なNbSとしての土地利用と建築と庭園の景観をブルーノ・タウトが絶賛したのです。

一方、修学院離宮は、花崗岩と丹波層群、山地と耕作地に加え、花折断層による段差や水辺が加わった、類まれな多様な要素の会う場所、異なった生態系の推移帯（エコトーン）です。この場所は後水尾上皇が長年かけて探し当てたとのこと。つまり庭園書の園治では「匠三分 主七分」と言いますが、筆者は「人三分 環境七分」かと思います。

この他、自然美に潜むフラクタル（部分と全体が相似）が多様な生物生息環境に貢献し、その成り立つ範囲と複雑さを示す次元が庭園の様式類型や縮景と関連すること、土木学会賞を受賞した枯山水庭園の雨庭機能研究等を紹介しました。（森本幸裕）



研究会当日は前日の暖かさが嘘のように、寒い日となりましたが、吉田神社境内では樹高20m以上のタマミズキ（室川宮司によると植栽ではなく、鳥散布のようです）が真っ赤な実をつけて出迎えてくれました。森本先生には先人達の環境に対する確かな視点が創り出した名園、また攪乱が文化を創り、生物多様性を育んだというたいへん意義深いご講演を80分にわたりいただきました。コメンテーターの今西先生（森本研究室のご出身）はコメントに関連して古墳、社寺林、公園緑地のアリ群集についての興味深いお話をいただきました（この記事は次号に掲載予定）。さいごに櫻井会長にご挨拶いただき、なごやかなうちに閉会しました（会員・非会員20名）。ご講演いただいた森本先生、コメンテーターの今西先生、ご出席いただいたみなさまに心より御礼申し上げます。（前迫ゆり）

令和8年度 年次総会の概要

研究発表・シンポジウム、懇親会、見学会に参加希望の方は、6月10日（水）必着で、下記申込書にご記入の上、学会事務局宛て FAX もしくは郵便にてお送りいただくか、同じ内容を Mail にて事務局宛てにご送信ください。

期日	時間	内容
6月20日 (土) 通常総会・特別講演・研究発表・シンポジウム・懇親会	9:00	集合（武蔵一宮氷川神社祈祷殿前）*御神門を入り、御社殿に向かって右が祈祷殿
	9:10～10:30	氷川神社正式参拝、境内社叢見学
	10:30～11:15	通常総会（氷川神社社務所二階大ホール）
	11:15～12:30	特別講演「氷川神社の歴史と祭り」 氷川神社禰宜 馬場直也氏
	12:30～13:30	昼食及び境内拝観
	13:30～14:00	研究発表1名
	14:10～15:10	シンポジウム【千年の杜と『水』を未来につなぐ】 基調講演「社域の環境・鎮守の杜を守り繋いできた古の技を現代に活かす」（仮題） 一般社団法人地球守・有機土木協会代表理事、NPO 法人地球守代表理事 高田宏臣氏
15:20～17:30	パネルディスカッション 司会進行（案）：社叢学会理事 賀来宏和 パネリスト 氷川神社権宮司 東角井真臣氏 「氷川参道の変遷と樹木管理について」 國學院大學神道文化学部長 黒崎浩行氏 「神職後継者教育と社叢とのよりよい連携に向けて」 瀬田玉川神社禰宜、一般社団法人第二のふるさと創生協会代表理事 高橋知明氏 「第二のふるさと創生協会の活動と神社界との連携」 一般社団法人地域緑花技術普及協会代表理事 細野哲央氏 「緑化技術者による社叢管理支援～越谷・久伊豆神社での活動記録」 前掲（基調講演） 高田宏臣氏	
	18:00～19:30	懇親会（氷川神社社務所二階小ホール）
6月21日 (日) 見学会	8:30～16:20 (集合時間 8:20)	集合：JR 大宮駅西口ソニックシティビル西側道路脇～高麗神社正式参拝～聖天院勝楽寺参詣～（昼食：狭山市内を想定）～川越氷川神社参拝～解散：集合場所と同じ *ソニックシティビルは大宮駅西口から徒歩5分（団体バスは西側道路の歩道デッキ下あたりに待機予定） *交通事情により、JR 大宮駅近隣の到着時間が遅れることがありますので、帰りの新幹線、航空便などは時間的余裕をもってご予約下さい。

* JR 大宮駅から氷川神社三の鳥居まで徒歩 15 分程度。もしくは大宮駅からタクシー利用（バス等の公共交通機関はありません）

* 氷川神社の近隣には、レストランなどの飲食店舗やコンビニエンスストアはありませんので、20 日（土）の昼食は各自ご用意ください。

----- 研究発表・シンポジウム及び関連行事の参加申込書 -----
FAX 075-212-2973

正会員は、通常総会の出欠については、同封のハガキに必要事項を記入の上、お送り下さい。

関連行事については、参加ご希望の（ ）欄に○をお付けください。同伴者がいらっしゃる場合は、家族・一般等の区分ごとに人数をお書きください。

（ ）研究発表・シンポジウム： 同伴（家族 名、一般 名）

（ ）懇親会： 同伴（家族 名、一般 名、学生 名）

（ ）見学会： 同伴（家族 名、一般 名）

* 研究発表・シンポジウム及び見学会に参加希望の会員外の学生は一般の取り扱いとさせていただきます。

お名前

当日連絡先（携帯電話番号・メールアドレス等）

【武蔵一宮 氷川神社】

祭神は須佐之男命・稲田姫命・大己貴命。第五代孝昭天皇三年創立と伝わり、古代より朝廷の崇敬を受ける。平安期『延喜式』名神大社に列す。武家崇敬も篤く、江戸期も朱印地三百石を受ける。東京奠都に当たり明治天皇は当社を武蔵国鎮守と勅定、明治元(1868)年、三年、十一年に行幸親祭。以後今日まで、例祭に勅使参向ある勅祭社である。旧社格は官幣大社(明治四年)。江戸時代初期の中山道整備の際造られた、境内まで直線約2kmの氷川参道の緑のトンネルは、当社に由来する「大宮」の象徴となっている。



氷川神社ホームページ

見学会

【高麗神社】

主祭神・高麗王若光は、『日本書紀』によれば天智天皇5(666)年に朝鮮半島北部の王国・高句麗より、国際情勢緊迫の中、使節の一員として来日した王族とされる。しかしその滞日中に故国が唐・新羅の攻撃を受け滅亡、一族と共に日本に帰化する。『続日本紀』は高麗若光が、外国王族出身の官人が朝廷より受ける姓「王」を、大宝3(703)年に賜ったと記す。

『続日本紀』はまた霊龜2(716)年に、朝廷が駿河、甲斐、相模等七国の高句麗系渡来人1,799人を武蔵国に集団移住せしめ、「高麗郡」を置いて同地開拓を任じたことを記録する。渡来氏族の技術力が期待されたものと推定される。この際、若光は指導者として山野の開発に尽力、没後この地に葬られ、やがて高麗郡民がその霊を守護神と祀ったのが同社、と伝わる。

河内国の許麻神社など、古代渡来人の歴史とその信仰を示唆する神社は各地にあるが、特に高麗神社で特筆すべきは、祭神を始祖としその末裔たる高麗氏が連綿として祭祀を司り、千三百年を経て現宮司の第六十代・文康氏に至っている点である。境内裏手には、近世初頭の古民家として貴重な、国指定重要文化財「旧高麗家住宅」も存在している。

平成29(2017)年9月20日には、天皇皇后両陛下の御親拝があった。

【聖天院】

高麗山聖天院勝楽寺と号し、神仏分離以前は高麗神社の別当寺であった。すなわち高麗王若光の菩提寺として、勝楽上人により天平勝宝3(751)年、歓喜天を

本尊に開基と伝わる。南北朝期に法相宗から真言宗に移り、のちに本尊も不動明王と改められて、現在は智山派に属している。四季の花が美しい庭園を擁し、特に「高麗王廟」(若光の墓)の所在地でもあり、近接の高麗神社共々、在地の人々や観光客のみならず韓国・朝鮮系の方々からも崇敬を受けている。

【川越氷川神社】

素戔鳴尊と奇稲田姫命の夫婦神を中心に、五柱の神々を祭る。氷川信仰は、往古より関東で主に荒川流域から広がるとされ、当社も古い由緒を持つが、室町時代の川越城築城以来は、城下の総鎮守として崇敬されている。特に江戸天下祭の風流を小江戸川越に伝える、国指定重要無形民俗文化財・ユネスコ無形文化遺産登録の「山車行事」は、当社の例大祭に伴う祭礼である。

現在の御神木は、本殿裏手に夫婦寄り添うように並び立つ、樹齢600年以上の二本の樺である。当社では、素戔鳴尊神話にゆかりある樹種、武蔵野台地の植生を考慮しつつ、鎮守の杜としての佇まいを未来に向けて残し育てる「氷川の杜」構想を、令和2(2022)年から進めている。そして「氷川神社直会殿と神社広場」が、令和3年度「かわごえ都市景観賞」を受賞しているほか、子供たちが境内で拾ったどんぐりを育て、苗木にして植樹する活動も始まっている。

なお、この「氷川の杜」構想と一連の活動は、濱野周泰・本学会副理事長の指導で進められており、巡見の当日も現地で、濱野副理事長による解説が予定されている。

参加費用及び注意事項

参加費(いずれもお1人)	見学会	懇親会(総会后)	総会シンポジウム
正会員・協力会員・賛助会員	12,000円	6,000円	無料
市民会員・同伴家族	14,000円	6,200円	
一般	15,000円	6,500円	500円
学生		2,000円	

<見学会ご参加に際してのお願い>

◇バスの座席には限りがあります。なるべくお早目にお申し込み下さい

◇参加費は事前に下記の口座にお振込み下さい(会費用振込用紙の金額を修正して使っていただいても構いません)

◇直前のキャンセルは返金できない場合があります

口座名「特定非営利活動法人社叢学会」 郵貯振替：口座番号 00950-0-172640

銀行振込：三菱UFJ銀行 京都支店 普通 6720345



伊豆諸島の照葉樹林と巨樹

話題提供：上條 隆志（筑波大学・生命環境研究系教授）

伊豆諸島は、伊豆半島の東に位置する伊豆大島（以下、大島）から南に連なる火山島であり、地理的には、嬬婦岩までを含む。本講演では、大島から青ヶ島に至る有人島を対象として、その自然、特に植物の特徴をご紹介いただくとともに、スダジイ巨樹が多いことで知られる三宅島に着目して、スダジイの生態やスダジイ巨樹の現状についてもお話頂いた（参加者26名）。

伊豆諸島の自然

伊豆諸島の有人島は、北から、大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、青ヶ島の9島である。噴火に着目すると2000年に大噴火した三宅島、1986年に溶岩流を流出した大島がある。一方、御蔵島は6,000年以上噴火しておらず、島全体が発達した森林におおわれている。地質によって島の景観も大きく異なり、新島や神津島のように白い流紋岩の堆積地が広がる島々もある。

陸続きになったことがない海洋島で、固有の生物が多い。一方、本州に近く、伊豆半島や房総半島にも分布する準固有種も多い。サクユリはヤマユリの固有変種で、伊豆諸島のすべての有人島に生育するが、本州には分布しない。また、準固有種であるイズノシマダイモンジソウは伊豆諸島に広く分布し、房総半島南部にも一部生育している。また、健康食として知られるアシタバや、雑種形成によりソメイヨシノを生み出したオオシマザクラなども伊豆諸島の準固有種である。

伊豆諸島の植物の特徴を本土と比較すると、葉の大型化、棘の消失、花の形態変化が大きな特徴である。タマアジサイの葉は本州でも大きいですが、伊豆諸島ではさらに大型となる。山菜で有名なタラノキは棘が多いことが特徴であるが、三宅島などの利島以南に分布する変種のシチトウタラノキほとんど棘がない。これは、島にはタラノキを食べるシカやウサギなどの中大型の草食獣が分布しないためと考えられる。また、主要な訪花昆虫であるマルハナバチ類が不在であるため、訪花昆虫の変化に伴い、花の形態が変化している。

伊豆諸島の自然の枠組みに深くかかわるのは噴火である。三宅島や大島のような活発な火山島では、噴火による破壊と再生を観察できる。三宅島には1983年、1962年、1874年の噴火に伴う溶岩流があり、その植生を比較することが出来る。ここでは、裸地→オオバヤシャブシ林→タブノキ・オオシマザクラ林→スダジイ林（極相林）へと植生が遷移する。植生遷移の研究に最適なフィールドであり、世界の生態学の教科書でも紹介されている。

火山の島、三宅島のスダジイとその巨樹の森

2000年に大噴火した三宅島はスダジイ林に広くおおわれている。巨樹の一部は、噴火によって焼失したが、今もなおスダジイ巨樹が3,000本以上あり、全国でも巨樹が最も多い市町村の一つである（ただし、巨樹本数については、調査する担い手の有無、測定技術なども関係し、正確な評価は難しい）。三宅島では、巨樹の存在とともに、調査する担い手に恵まれたことが、その膨大な本数記録につな



がっている。三宅島巨樹の会「やどりぎ」が結成され、観察会や巨樹調査が継続的に行われている。

三宅島に巨樹が多い要因として、温暖湿潤な気候条件であること、噴火の影響を免れた地域が広く存在すること、神社林や境界木としてスダジイの巨樹が残されてきたことがあげられる。また、巨樹の一部は数々の噴火の影響を乗り越えて生き残ってきたものである。たとえば、三宅島北東部に位置する椎取神社にはスダジイの巨樹の森が見られるが、2000年噴火直後は枯れたスダジイの幹ばかりの景観であった。20年あまりで回復したのは、スダジイが完全には枯死していなかったことやスダジイの高い萌芽力によるものである。スダジイは幹が枯死しても、根元から萌芽枝が発生し、枯れた幹を覆うように成長してゆくため、短期間で回復したと考えられる。

一方、スダジイ林の維持・回復には種子からの世代交代も必要である。スダジイはブナ科に属し、いわゆるドングリがその種子（堅果）となる。スダジイの種子は大きく、暗い林床で発芽し、生き残るのに適している。大型で散布距離は短い、鳥のヤマガラによって運ばれる。ヤマガラは、冬季の食料としてスダジイの種子を地面に埋めるといった貯食行動をするため、種子が遠くに運ばれ、食べ残された種子が発芽する場合がある。三宅島では、ドングリが芽生える可能性が低いと思われる崖などでも、実生を見つることがある。これはヤマガラが運んだものと考えられる。

スダジイは萌芽やヤマガラによる種子散布などを通じて森を維持・回復させてきた。しかし、三宅島を含めた伊豆諸島では、スダジイを脅かす問題がいくつか起きている。一つは、本州などでもナラ枯れを引き起こしているカシノナガキクイムシによる被害である。現時点では、被害拡大は縮小したものの、一時は夏季に巨樹を含めたスダジイの幹が枯死する被害が顕著であった。カシノナガキクイムシにより、枯死した巨樹がある一方で、鳥類との生態学的な関わり合いはスダジイに正の効果をもたらしていると考えられる。

最後に巨樹のこれからについて考えることとしよう。スダジイは萌芽再生するものの、巨樹としてみなされる幹自体は、噴火、病害、強風などで枯死するものであり、永遠のものではない。しかし、三宅島には、次の巨樹となりうるスダジイも多数存在する。このような次世代の巨樹を見守り、保全してゆくことが重要と考えられる。

◀寄稿▶

古社の現状 ～第12回宗像国際環境会議の発表から～

賀来宏和（社叢学会理事）

社叢学会も実行委員として加わる宗像国際環境会議に関し、昨年10月に宗像大社において開催された第12回の同会議報告については前号で紹介されたが、その折に発表者の一人として登壇の機会を得たので、発表要旨に少々加筆して紹介しておく。

筆者は、その御由緒に長い歴史を有する、いわゆる古社を中心に、全国で凡そ七千社弱の神社を参拝し、鎮守の森を拝観させていただいている。その古社の代表格は、平安期に律令の細則として定められた『延喜式』の第九、十巻である「神名式」に所載された延喜式内社である。

延喜式内社については、中世の長い戦乱の時代や自然の猛威などによって、その存在が未詳となった神社も多いが、江戸時代に至り、その比定作業が行われてきた。尾張藩初代藩主である徳川義直の『神祇寶典』（1646）を始めとして、出口延経や伴信友の同名書である二つの『神名帳考證』（1733、1813）、鈴鹿連胤の『神社覈録』（1870）と続き、明治政府の『特選神名牒』（1876）、『明治神社誌料』（1912）、栗田寛の『神祇志料』（刊行：1927）と引き継がれ、近年では、志賀剛博士の『式内社の研究』十巻（最終刊行：1986）、更には最も新しい体系的な調査研究として、皇學館大学編の『式内社調査報告』二十五巻（最終刊行：1995）がある。

筆者は、その『式内社調査報告』を引きつつ、インターネット上から得られる先達者の情報を加味しながら、同書に記載はないが、現地には「式内社」の社号標など延喜式内社としての伝えがあるお社や、旧社地に小祠や石碑が建立され、御旅所等の可能性がある場所などを含めて、4,900社前後を整理し、この中で宮中に奉斎されている神々三十六座と、不明の旧社地、奥宮などを除く4,800社を巡って来た。当該社そのものが未詳となった神社を除き、現況で何らかの神社の祭祀が残るすべてを参拝した来たということが出来る。

その参拝行で実感したことは、歴史的由緒を持つ多くの古社が、いわゆる中山間地に鎮座しているという現実である。

中山間地については、農林水産省の農業地域類型で定める中間農業地域及び山間農業地域にあたりとされるのが一般的であるが、その活性化を図るための諸施策の一つとして設けられた中山間地域活性化資金の対象とする中山間地域は、一体的な地域振興上の理由と思われるが、農業地域類型に相当する中間・山間農業地域よりもやや広い概念として、区域が選定されている。

先に掲げた延喜式内社総数のうち、西海道にあたる九州本島の筑前國、筑後國以下の国々と壱岐にあたる壱岐嶋、対馬にあたる對馬嶋には、「神名式」に所載された神社は合計で98社であり、それに対して論社等を含めて筆者が整理した対象社は174社（うち2社

は未詳）である。

これらのうち、中山間地域活性化資金の対象とする中山間地に鎮座する神社は、九州本島内で85社のうちの47社、壱岐、対馬は全域が対象の中山間地とみなされているので、それらを含めると174社のうちの実に136社が、この資金の対象とする経済的な課題を抱える地域に鎮座していることになる。

わが国の総人口が平成20年を頂点として減少に転じたことは周知の事実であるが、その中でも国勢調査による人口集中地区人口（都市人口）とそれ以外の農村人口は、昭和35年には農村人口が過半をしめていたものが、次第に農村から都市への人口移動が起り、昭和45年には都市人口が50%を超え、現在は70%が都市に居住する。平成27年と令和2年の調査結果を比較すると、総人口は0.7%減少する中で、都市人口はさらに1.6%増加、反面、農村人口は5.9%の減少となっている。

延喜式内社という限られた、しかも西海道での調査結果に過ぎないが、今後、一層の人口減少が進み、中山間地の集落が限界化し、場所によっては集落ごと消滅する恐れが強い中で、こうした中山間地の神社のみならず、我々の祖先が往古から祈りを捧げて来た社寺などの場を未来にどのように継承していくか、今、問われているように思う。

事務局から

今年も年次総会が6月に行われます。会員の皆さまにおかれましては、総会及び懇親会、見学会などの参加について、本紙の申込書等により、参加人数を含めて、早めにご連絡ください。あわせて、これらの参加費の事前振込をお忘れなきようお願いいたします。

本年度の学会費納入用の振込用紙を同封しておりますので、年会費のお振込みをお願い致します。振込に際しましては、年次総会の参加費と合算の上、同用紙にてお振込みいただいても結構です。

編集後記

会員各位のご協力により、今回も「鎮守の森だより」137号を無事発行することができました。たまたま、関西、関東、中部の定例研究会の次回開催が定まっておらず、予告記事原稿がありませんでしたので、私の宗像国際環境会議での報告を加筆して挙げさせていただきました。

今年6月の年次総会は、関東地区の担当で、埼玉県さいたま市に鎮座する武蔵一宮氷川神社にて開催されます。現在、年次総会当日のシンポジウム及び翌日の見学会などの企画構成のために、会場となる氷川神社さまを始め、埼玉県神社庁さまのご協力を得つつ、旅行代理店等との調整を始めております。

（編集担当 賀来宏和）

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号

TEL・FAX 075-212-2973

URL <http://www.shasou.org> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp